次元の扉は開かれた

秋月　弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
次元の扉は開かれた

【Ｎコード】
Ｎ９３６１Ｘ

【作者名】
秋月　弥生

【あらすじ】
５０５０年、人類は次元管理局のもと、妄想による2次元3次元の行き来を禁じられた。
次元管理局はこれを「次元移動禁止令」と定めた。
この次元管理局とは、人が造りだしたアンドロイドによって、次元を渡る者を監視及び処罰する組織である。
そんなさ中、犯罪者となったアリエスは、管理局員のレオと出会う。
人とアンドロイド。そして二人の行く末は…。

第1章　次元管理局次元番人課

５０５０年、人類は次元管理局のもと、妄想による2次元3次元の行き来を禁じられた。
次元管理局はこれを「次元移動禁止令」と定めた。
この次元管理局とは、人が造りだしたアンドロイドによって、次元を渡る者を監視及び処罰する組織である。
そして、次元移動禁止令を犯した者は「４次元送り」という刑に処される。
４次元は、無色・無音・食料・すべてが存在しない世界。
つまり4次元に送られれば、あとは死を待つだけとなる。
無論、送られた者は処罰の重さに関係なく、３次元に戻ることは出来ない。
この次元移動禁止令により、多くの人々が犠牲となった。

そして５０８０年。
ここは次元管理局次元番人課。
次元番人課とは、不正システムを利用して、次元を行き来する者を監視及び逮捕する部署である。
不正システムは「次元移動システム」といい、次元移動禁止令が定められて間も無い頃、インシュターという科学者の手によって開発された。
この次元移動システムを利用すれば、次元管理局の監視の目を潜り抜け、次元を自由に行き来することが出来るのだ。
そして、このシステムはインターネットで高値で売買されている。
無論、利用した者は「４次元送り」の刑に処される。
ここ数年は、次元管理局が「取り締まりシステム」を開発し、利用する者はだいぶ減った。
だが、このシステムが開発されても、不正利用者は後を絶たないの

だ。

「あ～なんか、事件でも起きねーかな」
「暇だと、身体が腐りそうだ」
「レオ、なんか面白いことないのか？」
「そういわれてもな～」
今日も不正利用者が居ないため、レオと同僚たちは暇だった。
このレオという男は、人が造りだしたアンドロイドで、創製者であるオーディンが最も愛情を注いでいるアンドロイドである。
レオはこのことをオーディンから聞かされて知っている。
そんなレオはこれを利用して、好き勝手に仕事をすることでも有名だった。
レオはどうにかしようと考える。だが、まったく良い案が浮ばない。
数秒後、監視モニターに一人の男が映る。レオは身体を乗り出して画面を覗き込む。
「あ！アイツ、いま次元移動システム使った！」
「マジで！？」
「そこ。女っぽい顔した男。嘘だと思ったら見てみろ」
レオはモニターを指して云う。同僚たちも次々とモニターに集まってくる。
「ほんとだ！」
「レオ、でかしたぞ！」
「よし！俺が捕まえてくる」
「レオ、やめとけ。お前は逮捕員じゃないだろ」
アンドロイドと云えども、仕事して行く上では段階というものがある。
次元番人は、まず監視する「監視員」になり、次に犯罪者を逮捕する「逮捕員」になるのだ。
資格取得方法は、一ヶ月に一度行われる試験を受け、合格すれば次の段階の試験を受けることができる。

試験に出る問題はごく簡単なもので、真面目に仕事をしていれば直ぐに受かる。
だがレオは、監視する時間になってもモニターの前に居ない、監視せずに休憩室で話し込む。などをして仕事をさぼるのだ。
これでは受かるものも受からない。
レオは２５歳の設定で製造され、次元番人に配属されて既に一年が経っているのだが、まだ監視員のままなのだ。
「行ったら、またオーディンに叱られるぞ」
「大丈夫だって。じゃ、行ってくる」
「ダメだ。行かせない」
「ロキ、離せ！」
同僚の一人である「ロキ」に手を掴まれて阻止される。
ロキは２７歳の設定で製造され、大人で欠点のない優秀なアンドロイドである。
「離さない。この手を離したら、レオはアイツの所に行くだろ」
「離せ！俺はなにがなんでも行くんだ！」
「レオって、あの話、本当だったのか？」
「あぁ。だってアイツ、レオのもろタイプだぜ」
「だから、行きたいのか」
「うっ…」
そう言われて顔を赤くする。
レオは他のアンドロイドと違って、かなり特殊なアンドロイドなのだ。
それは、男しか愛せない、というプログラムを持って製造されてきた。
どうしてこうなったのか、オーディンと造り手たちは一年かけてレオを調査した。
その結果なにもわからず、アンドロイドでも同性を愛せるのか、という実験も兼ねて、レオはそのまま製造されたのだ。
「やっぱりそうだったのか」

「うるせっ。いいから離せ！」
「そうとわかれば、行かせるわけにはいかないな」
ロキは怖い顔になり、レオの身体をモニターに押し付けた。
「イテっ！テメーなにしやがる！」
「何を云っても聞かないヤツには、きっちりお仕置きをしないとな」
「やめろ！ロキは俺のタイプじゃない！」
「それはどうかな。なんなら、いろいろ試してみるか？」
ロキに顔を近づけられ、押し退けようとしたその弾みで、レオは左手にあった逮捕員しか押すことが出来ない「ターゲットロックオン」のボタンを押してしまったのだ。
このボタンは、犯罪者の逃亡を防ぐため、足止めをするボタンだ。
また犯罪者は、無意識の内にその場から動くことが出来なくなる。
そして犯罪者は、次元管理局によって「取り調べ室」に連れて行かれるのだ。
「あ！！」
「レオ、お前わざとやっただろ」
「わざとじゃねーよ！」
「あ～ぁ、ロックオンのボタン押しちゃった」
「こりゃ～説教確定だな」
「うっ…」
同僚たちが騒いでいると、ギィーという音と共に3次元への扉が開いた。
一斉に扉の方を見る。レオは目を輝かせた。
次元管理局の掟で、ボタンを押した局員は押した本人が責任を持って逮捕に向わなくてはならないのだ。
「ロキ、そういうことだから、行ってくるわ」
「しかたない。行ってこい。ただし、ちゃんと戻ってこいよ」
「わかってるって。それじゃ」
「レオまって～」
ロキに手を振って扉に向おうとしたとき、同僚の一人である「アク

エ」に呼び止められて振り向く。
アクエは、１０歳の設定で製造された、人懐こい子供のアンドロイドだ。
「ん？アクエどうした？」
「レオって、本当に男しか愛せないプログラム入ってるの？」
「あれ？言ってなかったっけ？」
「言ってないよ」
「あぁ、入ってるらしいよ。でも、まだ好きな男が現れてないだけなのか、なぜかプログラムが起動しない。ま、そのうち起動するだろうね」
「そうなんだ。大変だね。でも頑張ってね」
「サンキュー。じゃ行ってきます」
「気をつけてね～」
「おう！」
レオは同僚に手を振り、３次元に渡った。

第2章　3次元

次元に到着した局員は、自分の姿が消えているか、プログラムチェックをすること。
局員は速やかに犯罪者を逮捕し、３０分以内に次元管理局に帰還せねばならない。
どんな理由であれ、局員は犯罪者以外の人と接触してはならない。
これを行った局員は「スクラップ処分」の刑に処する。

レオは3次元に出る前に、自分の姿が消えているか確認する。
問題ないことがわかり「出口」と書かれた扉を、力強く押した。
すると、目の前に広がる世界に目を丸くする。
本来なら次元を超えることが出来るのは、犯罪者を逮捕する逮捕員だ。
無論、まだ監視員であるレオは、初めて次元にきたのだ。
「スゲー。これが3次元か。やっぱ、実際に見ると迫力あるなぁ」
いつもモニターで見ている次元に、いま居るんだと思うと嬉しくなる。
レオは、しばらく景色に見とれていた。
景色を見ていて、任務を終らせて戻るだけなんてもったいない、と思った。
こうなると、レオを止めることはできない。レオの悪いサボり癖が騒ぎ出す。
レオはいま、犯罪者以外の人には見えないように、プログラムされているのだ。
これを利用して、犯罪者に悪戯をしよう、と思いつく。
そして「ＧＰＳプログラム」を作動させ、犯罪者である「アリエス」のもとへ向った。
この「ＧＰＳプログラム」とは、犯罪者の居場所を確認するプログ

ラムであり、次元の位置確認をするプログラムである。

アリエスは、不正の「次元移動システム」を利用して、大好きなアニメキャラクター「レオン」と自分がデートする、という妄想をしたのだ。

レオはアリエスの居場所を見つけ、アリエスに声をかけたが、まったく反応しない。

すぐさま「超音波システム」を作動させ、このことを次元番人課に報告した。

この「超音波システム」とは、超音波を利用して音を出す・音を鳴らすことが出来る。

または、局員との連絡手段としても用いられる。

「こちらレオ、応答願います」

『レオ！なにかあったのか！？』

「あ、ロキか。ターゲットが反応しない」

『なんだと！？』

そのとき、レオのＧＰＳプログラムが作動した。

「あ、なんか、ターゲットは２次元にいるらしい」

『それ本当か！？』

「あぁ、プログラムが作動してるから、間違いない」

ロキも、コントロールパネルを操作して、ターゲットの位置を確認する。

『いま確認した。確かに２次元に居るな』

「だろ。ロキ、少しは俺を信用しろって」

『お前の勤務態度を見ていると、どうも信用ならん』

「うっ…」

本当の事を言われて、言葉につまる。

『それでだ。レオ、よく聞け。ターゲットは、まだ次元移動システムを使用中だ』

「そうか。だから反応がなかったのか」

『あぁ。コイツは相当、いい妄想をしてるんだろうな』
「で、ロキ。俺はどうすればいいんだ？」
監視員のレオは、対処方法を知らない。すぐさまロキに答えを求めた。
『本来なら、逮捕員が2次元に行き、ターゲットを3次元に連れ戻す』
「じゃぁ、いますぐ2次元の扉を用意してくれ」
『それはできん』
「なんでだ！」
やる気になったところで、ロキに止められる。
『それは、お前がまだ監視員だからだ』
「そんなこと、云ってる場合じゃねーだろ！」
ロキは当然のことを云ったのだが、融通が利かないロキに腹を立てる。
『まぁ、違う方法はあるんだが…』
「教えろ。それで連れ戻してくる」
『教えてもいいが、それだとお前がスクラップ処分される』
「処分されてもいい。だから教えろ！」
方法を云わないロキにイラつき、自分の意見をロキに怒鳴りつけた。
『大切なお前を、失うわけにはいかない』
「なに云ってんだよ。もしそうなっても、ロキを恨んだりしない」
実はロキはレオのことが好きで、さらりと告白をしたのだが、冷静さを失っているレオは、まったく気がついていない。
『恨むとか、そういう問題ではなくてだな。俺はお前のことが…』
「つべこべ云わずに、早く教えろ！」
『はぁ～わかった。責任は俺が取る。それで方法は…』
その方法とは、音を使ってターゲットに気づかせる。というものだ。ターゲットが気づく音であれば、なにを使っても可能だが、物によっては凄い音が出る。
その音で人がくるかもしれない。そうなれば、人と接触することに

なる。
だからよく考えて、物を選ばなくてはならないのだ。
レオは、音を出しても人に驚かれない物はなにか、と考える。
すると、テーブルの上に置いてあった、アリエスの携帯電話に気がつき、超音波システムを使えば、携帯を鳴らすことが出来るかもしれない、と思いついた。
そしてレオは「超音波システム」を作動させ、アリエスの携帯に電話をかけた。

アリエスは妄想中、携帯電話が鳴っていることに気がつき、電話の方を見る。
だが、すぐに呼び出し音は鳴り止んだ。
気を取り直してまた妄想をしたとき、また電話が鳴る。
2、3度の短いコールのあと、すぐに切れた。
これが3回ほど繰り返され、4回目のコールが鳴ったとき、アリエスは通話ボタンを押した。
レオは少々回りくどいやり方をしたと思ったが、これぐらいしないと3次元に戻ってこないと思ったから、この方法をとったのだ。
「もしもし、どちら様ですか？」
アリエスがそう云っても、レオは何も云わなかった。
「もしもし、いたずらなら切りますよ」
アリエスがそう云った瞬間、レオはシステムを切り、アリエスの前に姿を現した。
「やっと戻ってきたか」
「あ！次元管理局！」
「犯罪者…あれ？コイツの名前って、なんだ？」
「俺の名前は…アリエスです…」
「アリエスか。よし！気を取り直してもう1回。犯罪者アリエス。お前を逮捕する」
「すみませんでした…」

「やけに素直だな。こうも素直だと調子が狂う」
「あなたは俺に暴れてもらいたかったんですか？」
「ま、そんなカンジ」
「あなたって、ヘンな人ですね」
「ヘンな人って、妄想するお前に云われたくねーよ！」
アリエスに散々なことを云われたうえに、笑われてしまった。
「笑うな！ほら、さっさと行くぞ！」
レオは素早く次元移動システムを回収すると、再び超音波システムを作動させた。
「ロキ、次元移動システムを回収した」
『すみません。イオスです』
イオスは、３０歳の設定で製造された、几帳面かつ真面目なアンドロイドだ。
「あれ？ロキは？」
『ロキはいま席をはずしています』
「そうか。わかった」
『では、いま扉を出現させます。あと1分だけ待ってください』
「了解～」
次元管理局に帰還するには、管理局側から「戻る」の扉を出現させてもらうのだ。
レオはそう云うと、アリエスの手に手錠をかけ、扉の出現を待った。
「あの～あなたさん」
「あなたさん。じゃなく、俺はレオ！」
「レオン！？」
「レオンじゃない。レオだ！」
名前を間違えられて、大きな声でハッキリと名前を云う。
「レオさん。質問があります」
「質問？なんだ？」
アリエスは俯いて質問する。
「俺はまた、ここに戻ってくることはできますか？」

「戻ってこれない」
「では、ここにある物は、どうなるんですか？」
「次元管理局がすべて消去・処分する」
「消去、処分…ですか…」
アリエスは目に涙を浮かべて云った。
「残酷だとは思うけど、次元移動システムを使ったお前が悪いんだからな」
「はい。そうですよね…」
すると、レオの超音波システムが作動し、イオスが話しかけてきた。
『レオ、扉を出現させました』
「お！扉でてる」
『そうですか。では戻ってきてください』
「了解～」
レオはアリエスの腕を掴んで扉に入る。
「あ～ぁ、イタズラしてやろうと思ったのになぁ～」
「いたずら？」
「何でもない。こっちの話。さ、行くぞ」
「はい…」
アリエスは扉に入ると振り返って「さよなら。レオン」と呟いた。

第3章　帰還

レオが3次元に行っているあいだ、次元番人課では「監視員が次元を渡った」と騒ぎになっていた。
「ただいま戻りました」
「おかえり～」
「アクエ、ただいま」
3次元から戻ったレオは、逮捕員にアリエスを引き渡し、アクエの頭を撫でた。
ちょうどそのとき、席をはずしていたロキが戻ってきた。
「あ！ロキ、ただいま。なぁ～ロキ、3次元ってスゲーな」
「レオ…話しは…あとだ…ちょっと…きて…くれ…」
「どうした？なんかお前、しゃべり方がヘンだぞ」
「気の…せい…だ…」
「やっぱり、ヘンだ。少し休憩するか？」
「いや…いい…そう…気に…するな…」
ロキはレオの腕を掴んで、廊下に連れ出した。
「レオ…落ち着いて…聞いて…くれ…」
「なにかあったのか？」
「お前が…3次元に…行ったこと…オーディンに…知られた…」
「マジで！？」
「あぁ…オーディンは…お前と俺を…スクラップ…処分…すると…云ってた…」
「ちょっとまて！俺が処分されるのはわかるが、なんでロキまで処分されないといけないんだ！」
「お前を…止めなかった…から…だそうだ…」
「俺、オーディンに会って、話してくる」
「話しても…無駄…だ…」
「オーディンは優しい人だ。話せばわかってくれる」

「レオ…もう…無理だ…」
ロキはそう云うと、よろけて体勢を崩す。レオは瞬間にロキの身体を支えた。
「ロキ、大丈夫か！？」
「正直…限界…だ…」
「おい！しっかりしろ！」
「れお…これを…みて…くれ…」
「これは！！」
ロキはレオに部品を手渡した。レオはそれを見て目を丸くする。
その部品は、ロキの「起動システム」だった。
この「起動システム」とは、人でいう所の心臓にあたる。
そして、アンドロイドには「起動システム」が２つ入っているのだ。
もし誤作動が起きて停止しても、もう１つが起動するように造られているため、完全停止を防ぐことが出来る。
これは２つ内臓されていればの話だが、１つしかないとなれば話は別だ。
「ロキ、どうしてこれを、お前が持ってるんだ！」
「オーディンに…ぬかれた…」
「なんだって！？」
アンドロイドにとって、起動システムを抜かれるということは、死を宣告されたと同然なのだ。
ロキはいま、１つの起動システムだけで動いている。
１つの起動システムだけでは、アンドロイドに大きな負担がかかるのだ。
「おれは…もう…げんかい…だ…」
「ロキ！しっかりしろ！いまオーディンを呼んでくる」
「いい…おれの…そばに…いて…くれ…」
「なに云ってんだよ！早くしないとお前が！」
「れお…じかんが…きた…ようだ…」
「そんなこと云うな！」

レオは、今にも停止してしまいそうなロキの身体を、必死になって支える。
「れお…おれは…」
「なに？」
「おれは…おまえの…ことが…す……」
「ロキ！しっかりしろ！」
ロキは最後まで云うことなく、完全に停止してしまった。
「ロキ…いつも…みたいに…俺に…命令…しろ…」
レオの目から大粒の涙が零れる。
「これが…涙…俺…泣いてるって…こと…だよな…」
レオは初めて見る自分の涙に驚く。
涙がどんなときに出るのか、レオにもインプットされている。
その涙の理由は、ロキが停止して悲しんでいる、とわかった。
「ロキ、これが悲しいという、感情なんだな」
レオはそう云うと、完全に動かなくなったロキの身体を抱きしめた。
すると、なかなか戻ってこないレオを心配して、アクエは廊下に行く。
そこでレオが泣いていることに気がつき、駆け寄った。
「レオ、どうしたの？」
「ロキが停止した…」
「え！だって、僕たちには起動システムが2つ入ってるから、停止なんかしないよ」
「アクエ、これを見てくれ」
ロキの起動システムをアクエに渡すと、アクエは目を丸くする。
「これ、起動システムだよね？どうして、これがここにあるの？」
オーディンがしたこと、ロキから聞いたこと、すべてをアクエに話した。
すべてを聞いたアクエは、起動システムを握りしめて泣く。
「ひどい…だからって…」
「そうだな。俺が3次元に行かなければ、ロキはこんな目に遭わず

にすんだ」
「レオのせいじゃないよ。これはオーディンが悪いんだよ」
ロキはアクエの頭を撫でると、俯いてアクエに云う。
「な～アクエ。俺たちって、なんなんだろうな」
「レオ…」
「人からしたら、おもちゃ？それとも、ただの機械？」
レオは顔を曇らせてアクエに問う。アクエもその言葉でまた泣きだした。
「レオ…ぼくたちは…おもちゃでも…きかい…でも…ないよ…」
「あぁ。俺たちは、おもちゃでも、機械でもない。人だ」
アクエは頷くと、レオを抱きしめて云う。
「レオ、ロキが停止して悲しいよね？」
「あぁ、悲しいよ」
「じゃぁ、僕がレオの側にいてあげる」
「そうか。アクエ、サンキュー」
アクエを抱きしめ返すと、そっと頭を撫でた。

このあとロキは「スクラップ処分室」に運ばれた。
レオもオーディンに「一緒に来るように」と云われて、あとをついて行く。
この「スクラップ処分室」とは、人で例えていうならば火葬場だ。
アンドロイドはここでスクラップされ、ただの鉄くずになる。
そして、スクラップするのは、創製者であるオーディンが行うのだ。
オーディンはロキを実験台に寝かせる。
その姿は、何処から見ても人にしか見えない。レオは胸が痛んだ。
「レオ、よく見ておきなさい。いずれ、お前もこうなるのだから」
「オーディン。なぜロキから、起動システムを抜いたんだ」
レオはオーディンを睨みつけた。
「ロキはルールを守らなかったからだよ」
「だからって、処分しなくてもいいだろ！」

「これはルールだから、仕方のないことなんだよ」
「だからって！」
「レオ…そろそろ始めるよ」
「おい、聞いてんのか！」
オーディンは、怒鳴りつけるレオを無視して云う。
「レオ、特別にロキの好きな部品をあげよう。どこがいいか選びなさい」
「部品とかいうな！ロキは…」
「所詮、アンドロイドは部品の塊にすぎない」
「だからって！」
「レオ、早く選びなさい」
「……。わかった。じゃぁ…記憶システムで…」
記憶システムには、アンドロイドの記憶が入っている。
人でいうところの脳にあたる部分だ。
「記憶システムだね。いま取り出すから待ってなさい」
オーディンは電気メスを取ると、ロキの頭部に当てて切っていく。
瞬間、レオは目を背けた。
すると今度は、金属と金属が外れる音がして、両手で耳を塞いだ。
「取れたよ。これが記憶システムだ」
手にした物は、縦３ｃｍ・横７ｃｍ・幅１ｍｍの長方形のカードだった。
「これが記憶システム…」
「お前の頭部にも、同じ物が入ってる」
こんな薄っぺらいカードに、ロキの記憶が入っていると思うと辛くなる。
「もう、欲しい部品はないね？」
「ありません」
「それでは始めるよ」
「俺、出ていきます」
「ロキの最期を見届けなくていいのかね？」

「見たくないので…」
「そうか。あ～レオ。お前の処分は追って知らせる」
「……。わかりました。では…」
友人が目の前で粉々になるなど見たくない。
レオは「ロキ、さよなら」と呟いて部屋を出た。
ドアを閉めると、ガシャンという物凄い音がして、レオは耳を塞いでしゃがみ込む。
そして、しばらくその場で泣き続けた。

第４章　取り調べ室

アリエスは取り調べを受けていた。
犯罪者は処刑される前に、どうして次元移動システムを使用したのか、入手ルートは何処からなのか、逮捕員に訊ねられるのだ。
アリエスと逮捕員である「イグド」は、机に向かい合って座っていた。
イグドは、４０歳の設定で製造され、正義感が強いアンドロイドだ。
「犯罪者アリエス。誰からこれを買った」
「しりません…」
「知らない。で済むとでも思ってるのか！」
「本当に知らないんです」
「嘘をつくな。これを持ってる時点で、買ったしかあり得ないんだ」
「ですから、本当に…」
「いいかげんにしろ！」
大声で怒鳴られて、身体をビクりとさせる。
「云ってしまえば、楽になる。さぁ、云うんだ」
「そ、それは…」
アリエスは俯いて、入手先の会社を云った。
イグドは、すぐさま超音波システムを作動させ、イオスに連絡をする。
「こちらイグド。次元移動システムの出所がわかった」
『こちらイオス。了解しました。いま取り調べ室に向います』

そのとき、レオはイオスの近くに居た。
取り調べ室には、逮捕員しか入れない。
監視員であるレオはイオスの言葉を聞いて、アリエスに文句の一つでも云ってやろう、とイオスの後を付けた。
「レオ、何処に行くんですか」

「ちょっと、そこまで」
「取り調べ室なら、入れませんよ」
「わかってるって」
取り調べ室までついて行くと、ドアの前でイグドが待っていた。
「あ～イオス。これを見てくれ」
「これは、次元移動システムですよね？従来の物より小型ですね」
イオスはイグドから、縦横５ｃｍの正方形の次元移動システムを受け取る。
「あぁ。ずいぶん進化したな」
「ですね。これでは、どこかに隠されたら見つけられません」
レオは、二人が次元移動システムに気を取られている隙に、取り調べ室に飛び込んで鍵をかけた。
『レオ！出てきなさい！』
「コイツに話しがある。話せば出る。だから少しだけ時間をくれ」
『ダメです。今すぐ出てきなさい』
『レオ、ドアを開けろ！』
イグドとイオスはドアを叩く。レオは無視してアリエスの向いに座った。
「さてと、始めるか」
「あ！レオン！」
「だから、俺はレオンじゃなく、レオだ」
また名前を間違えられて頭にくるも、気を取り直してアリエスに云う。
「アリエス。お前のせいで、俺は友人を失った」
「そうなんですか」
「ロキに謝れ」
「どうして、俺が謝らないといけないんですか」
「お前が、次元移動システムを使わなければ、ロキは死なずにすんだ」
「俺のせいにしないでください」

「お前な！」
レオはアリエスの胸倉を掴んで、拳を振り上げた。
「暴力反対！」
「お前を殴らないと、俺の気がすまないんだよ！」
「わ、わかりました。殴られるのはイヤなんで、代わりに…その…」
振り上げた拳を下ろして、アリエスの話を聞く。
アリエスが云ったことは、アリエスの下の窄まりにレオのモノを入れる。ということだった。
「そんなこと出来るわけねーだろ！第一、俺にそんなモン付いてない！」
「男なのに、ついてないんですか！」
「あぁ。こう見えて、これでもアンドロイドだからな」
「次元管理局員って、アンドロイドだったんですか！」
アリエスは初めて知る事実に、目を丸くする。
「あぁ、そうだよ。ここに居る全員、アンドロイド」
「そんなにカッコイイのに、アンドロイドだなんて信じられない」
「はぁ？俺がカッコイイ？」
「レオンに似ていて、カッコイイです」
こないだから気になっていた「レオン」という名前。レオはアリエスに訊ねる。
「その、レオンって誰？」
「俺が好きな、アニメキャラクターの名前です」
「だから俺のことを、レオンって云ってたのか」
「はい。すみません…」
顔を真っ赤にすると、俯いて答えた。
「なるほど。それで俺にして貰いたいってわけか」
「はい。ダメでしょうか…」
「ダメもなにも、俺にはアレがついてないからな…って、これは！！」
そのとき、レオにプログラムされているシステムが起動した。

レオには、それが何のプログラムだか、すぐにわかった。
起動したプログラムは、オーディンが実験に入れておいた「同性愛システム」だった。
そして、この「同性愛システム」とは、好きな同性が現れたときに起動し、相手を思い愛する。というプログラムである。
「レオさん？どうしたんですか？」
「いや、なんでもない。それって、指を使えばいいんだろ」
同性愛システムがレオに、次から次へと指令を送る。
「はい。やり方、知ってるんですか？わからなければ教えますが」
「知ってる。こうするんだろ」
「あっ！！」
レオはそう云うと、アリエスのズボンと下着を一気に剥ぎ取り、アリエスの下の窄まりに指を入れては、内壁を掻き回す。
「ここをこうすると、スゲー気持ちいいんだよな」
「はい…きもち…いい…です…あっ…」
内壁を何度も抉り、アリエスを絶頂に追い込んでいく。
「はぁ、はぁ、あっ、も…もっと…そこを…」
「お前はここが気持ちいいのか」
「はい…もっと…して…くだ…さい…あっ…」
「じゃぁ、次はこれだな」
気持ちいいと云われて、レオは嬉しくなる。
そして、他に何をすれば相手が喜んでくれるのか、わかっていた。
窄まりから指を抜くと、今度はアリエスのモノを握って、扱きにかかる。
手を早く動かし、アリエスを追い込む。
「や、あっ、もう…だめ…」
「もう限界？」
「はい…いき…たい…です…」
「わかった。お前をいかせてやる」
「はぁ、あっ、あっ、あぁぁぁぁ！」

レオが最後の仕上げにかかると、アリエスは爆ぜた。
するとレオは、自分の指に付いたアリエスの白濁を舐め取った。
その瞬間、レオは床に倒れ込んだ。
「レオさん！！」
『アリエス。どうされましたか？』
アリエスの声で、イオスがドアの向こうから声をかけた。
「レオさんが倒れました」
『わかりました。今すぐ開けてください』
『イオス。なにかあったのか？』
取り調べ室の鍵を取りに行っていたイグドも駆け寄った。
アリエスがドアを開けると、二人は中に入る。
すると、二人は倒れているレオを見て、目を丸くする。
イオスはすぐにレオの胸に耳を当て、起動システムが作動しているか確認する。
「イグド。大変です。レオの起動システムが停止してます」
「なんだと！？」
「２つ同時に停止などありえませんね」
「あぁ。これはシステムエラーか？」
「わかりません。オーディンに見てもらいましょう」
「そうだな。直ればいいんだが…」
イグドはレオを見て、そう呟いた。アリエスも心配してレオを覗き込む。
「あの…レオさん、どうしたんですか？」
「レオは停止状態だ」
「停止状態って？」
「このままでは危ない」
「危ないって！レオさん、助かりますよね！」
「正直、助かるかわかりません」
アリエスはイオスの言葉を聞いて涙ぐむ。
「イグド。急ぎましょう」

「俺もついていきます！」
「いいですが、処置室に入ることはできませんよ」
「それでも、かまいません！」
「では、ついてきてください」
レオはイオスとイグドに担がれて処置室に運ばれた。

第5章　処置室

緊急を要し呼ばれたオーディンは、処置室で準備をしていた。
この「処置室」とは、アンドロイドに異常があった場合、メンテナンスを行う部屋である。
そして、メンテナンスを行うのは、創製者であるオーディンが自ら行う。
「アリエス、あなたは中に入ることはできません。ここで待っていてください」
「わかりました」
「イオス、アリエスは俺が見張っている。レオを頼む」
「わかりました。アリエスをお願いします」
イグドは、イオスにレオを渡すと、壁に背をつけて腕を組む。
「レオさん。助かりますよね…」
「正直、俺にはわからん。あとはあの人に託すしかない」
アリエスは頭を抱えて、廊下にしゃがみ込んだ。

処置室に運ばれたレオは、すぐさま緊急メンテナンスに入る。
オーディンはレオを作業台に寝かすと、電気メスで胸部を開き、起動システムの様子を見ていく。
起動システムを見たオーディンは、顔を歪ませて首を横に振った。
「イオス、レオはもう助からない」
「嘘ですよね？嘘だって、言ってください！」
信じられない事実に、イオスは声を張り上げた。
「いずれレオは、スクラップ処分の刑を受ける。このままここで…」
「イヤです！レオを助けてください！」
「それは出来ない」
「どうしてですか！」
「これは私が決めた、法律だからだよ」

イオスはそれを聞いて、融通が利かないオーディンに思いをぶつける。
「法律がなんだって言うんです。あなたはレオを造ったとき、廃棄するはずのレオをそのまま造りましたよね。それはあなたがレオを愛しているからですよね。でしたら、レオを助けたいと思わないんですか！」
レオには原因不明の「同性愛システム」が入っているが、実は原因不明でも何でもなく、これはオーディン自ら入れたシステムだったのだ。
「確かに私は、製造の段階でレオを愛してしまい、同性愛システムを入れた」
「でしたら、助けるのが当然です！」
「だが、ダメなんだよ」
「なにがダメなんですか！」
「人がアンドロイドを愛してはいけないのだよ」
「愛していれば、人もアンドロイドも関係ないです！」
イオスの言葉を聞いて、オーディンは「そうだな」呟いた。
「そうです。ですからレオを助けてください」
「わかった。レオを助ける」
「ありがとうございます！」

オーディンは、すぐさま作業に取りかかった。
イオスもオーディンの横で作業を見守ることにした。
停止した起動システムを２つ取り出し、新しい起動システムに入れ替える。
そして、２つの起動システムに色取り取りの銅線を繋いでいく。
イオスはその作業を見て「さすが創製者だ」と関心する。
その作業は１０分ほどで終了した。
２つの起動システムを繋ぎ終えると、レオからは起動する音が聞えてきた。

イオスは、レオの起動システムが作動した音を聞くと、目を丸くする。
「イオス。レオはもう大丈夫だよ」
「本当ですか！？」
「あぁ。起動システムを強化しておいたから、もう停止することはない」
「そうですか。ありがとうございます！」
「礼を云うのは、私の方だよ。イオス、ありがとう」
オーディンは礼を云うと頭を下げた。
「いえいえ。頭を上げてください。まだ最後の作業が残ってますよ」
「そうだな。では、仕上げといくか」
オーディンは頭を上げると、レオの胸部を閉じた。
「これで完成だ。レオはもうじき気がつくだろう」
「レオが目覚めるのが楽しみです」
「そうだな。あ～特別にアリエスを中に入れてあげなさい」
「いいんですか？」
「あぁ。今日は特別だからね」
「ありがとうございます！」
イオスがドアを開けようとしたとき、レオは頭を抱えて身体を起こした。
「あれ？ここどこだ？」
「処置室だよ。レオ、気分はどうだい？」
「オーディン！それにイオスまで！」
「レオ、気がつきましたね」
「あぁ。いつもどおりのレオだ。問題ないだろう」
「ですね。安心しました」
レオは何のことだかわからず、二人の顔を交互に見る。
オーディンはレオの頭を撫でると、ここまでの経緯を話した。
「なるほどね」
「レオ、なんでこうなったか、話してもらえるか？」

「あ～確か、アリエスのアレを擦って、それで精液を飲み込んで…」
オーディンはそれを聞いて、目を丸くする。
「オーディン。どうやら、レオの同性愛システムが作動したようですね」
「そのようだな」
「精液を飲む。とまでプログラムしてあるとは、正直驚きました」
「本来なら飲み食いしないアンドロイドが、精液を飲んでしまったというわけか」
「そうですね」
「レオには悪いことをさせてしまったな」
「結果、直ったのですから問題ないです。これでレオが直らなかったら、私はあなたを恨んでましたけどね」
仲間はずれにされた気分のレオは、膨れ面で二人に云う。
「二人でなにコソコソ話してるんだよ」
「なんでもないですよ」
イオスはそう云うと、処置室のドアを開けた。
アリエスはドアが開く音で、素早く立ち上がった。イグドもドアの方を見た。
「イグド、アリエス。レオは無事です」
「本当ですか！？あ～よかったぁ～」
「そうか。助かったか」
「アリエス。どうぞ中へ」
「え！入ってもいいんですか！？」
「今日は特別です」
「ありがとうございます！」
アリエスは一礼してから処置室に入ると、レオを見て抱きしめた。
「アリエス！？」
「レオがいきなり倒れて…」
「もう大丈夫だよ。だから泣かないで」
レオはアリエスの顎を掴むとキスをした。アリエスはその行為に目

を丸くする。
「アリエス。好きだよ」
「俺もレオさんが好きです」
「お前が好きなのは、俺じゃなくレオンだろ」
「違います。本当にレオさんが好きです」
オーディンは二人を見て、処置室を出ようとしたとき、レオに呼び止められる。
「あ、オーディン。俺の処分はいつ？」
「その件については破棄する」
「マジで！？」
ガッツポーズをしてアリエスに抱きつく。
「レオ、アリエスのことなんだが」
「ん？アリエスがどうかしたのか？」
「いや、あとで話す」
「わかった。あ！オーディン。それと、俺を助けてくれてサンキュー」
レオの言葉を背中で聞き、振り返ることなく処置室を後にした。

第6章　4次元送り

レオが処置室から戻ったあと、アリエスは取り調べの続きを受けた。
「そろそろ時間だな」
「俺、どうなるんですか？」
「処刑される」
「それ、どんなのですか？」
「4次元送りの刑と云って、この世に存在しない4次元の世界に送られる」
「4次元…ですか。想像つかないです」
「そうだろうな。4次元は水も食料も、音さえも何も無い世界だからな」
「それじゃ俺は死んじゃう…」
「そう、つまり4次元送りとは死罪のことだ」
「そんな…」
俯いて涙を流す。そしてイグドに願いごとをする。
「すみません。レオさんに会わせてもらえませんか？」
「それは出来ん」
「どうしてですか！」
「会わせたらレオが悲しむだろ」
「レオさんは、このこと知ってるんですか？」
「あぁ、知ってる」
「そうなんですか…」
「それでもレオはお前のことを好きになってしまった。レオはいま辛いだろうな」
「ですよね…」
自分があんなお願いをしなければ、辛い思いをさせないですんだのに、とアリエスは後悔して涙が止まらない。
「お前の勝手でレオを苦しめた。4次元で死ぬまで反省しろ」

「はい…すみません…でした…」
「それでは、これにて取り調べを終了する」
イグドはアリエスに手錠をかけると、取り調べ室を出て処刑室に向う。
この「処刑室」とは、犯罪者を４次元に送る部屋である。
処刑室では、４次元の扉だけを出現させることができる。
アリエスはイグドに連れられて廊下を歩く。
「もうすぐ処刑室につく。覚悟は出来てるか？」
「はい…出来てます…」
「アリエス！」
俯いて答えると、向いから来たレオに声をかけられた。
「レオさん！どうしてここに！」
「オーディンに云われて来た」
「そうだったんですか。最期に会えて嬉しいです」
「あぁ、俺もだ」
イグドは、そんな二人のやり取りを見て咳払いをする。
「あ～イグドすまん。つい…」
「アリエス時間だ。行くぞ」
「はい…」
「アリエス！行くな！」
アリエスは振り向かず「レオさん、さようなら」と呟いた。
処刑室のドアが閉まると、レオは頭を抱えて座り込んだ。

アリエスの処刑はすぐに行われた。
処刑は創製者である、オーディン自ら執り行う。
「これより犯罪者アリエスの処刑を行う。アリエス、最期に云い残すことはないか」
「ありません…」
アリエスは目に涙を溜めて云う。オーディンは次元出現装置の前に行く。

そして、４次元の扉を出現させると、アリエスの手錠をはずした。
「行きなさい。出口が見えるまで進めば、その先はもう４次元だ」
「わかりました」
アリエスはオーディンに一礼すると、４次元の扉に足を踏み入れる。
扉が閉まる瞬間、処刑室に猛スピードで入ってきたレオは、４次元の扉の中に滑り込んだ。
「レオ！！何をしている！早く出なさい！」
「オーディン。いままでサンキュー。元気でな～」
オーディンは、急いで次元出現装置を操作するも間に合わず、４次元の扉は閉まった。
「レオーーー！」
オーディンはレオの名前を叫び、床にくずおれる。

最終章　４次元

「レオさん！？」
「アリエス。来ちゃった」
次元の扉に滑り込んだレオは、アリエスを抱きしめて耳元で囁いた。
「どうして、来たんですか！もう管理局には戻れないんですよ！」
「お前とずっと一緒にいたかったから来た」
「レオさん…」
「俺は戻れなくてもいい。お前を失うほうが辛い」
更に強く抱きしめられて涙を流す。レオは出口の光に気がついた。
「アリエス。もうすぐ４次元だ。行こう」
「はい！」
レオは、アリエスの手をしっかり握り、出口と書かれた扉に入る。
次元の扉を出ると、二人は目の前に広がる光景に目を丸くする。
そこは、どこまでも広がる真っ白い空間だった。
「なんだこれ！」
「真っ白い空間…ここが４次元？」
「あぁ、間違いなく４次元だろうな」
「ですよね…」
握っていたアリエスの手は小刻みに震えていた。
「アリエス、震えてる。怖い？」
「こ、怖くない…です…」
「平気って顔してない」
「ほんとに…へいき…です…んっ…」
レオは、アリエスの顎を掴んでキスをした。
「大丈夫。俺がついてるから」
「そうですよね」
「あぁ。しかしまぁ～ホントに何もないな」
「ですね…」

「な～アリエス。本当に何も無いか、少し歩いてみないか？」
「そうですね。行ってみましょう」
繋いだ手はそのままに、二人は歩きだす。

行けども行けども景色は真っ白で、物体さえなかった。
どのぐらい歩いたのだろう。アリエスは足を止めた。
「アリエス、どうした？」
「もう歩けません…」
「わかった。ここで休憩しよう」
「すみません。ありがとうございます」
二人は座り、レオは大の字になって寝転がる。アリエスは足を摩った。
「本当に何もないですね」
「ってか、死体もなかったな」
「ですね。ここに送られた人達は、いったいどこへ行ったんでしょうか…」
「そうだよな。って、もしかして、ここに居るのは俺達だけ！？」
「そうなりますね」
アリエスはそう云うと、膝を抱えて俯いた。
「誰も居ないほうがいいじゃん」
「どうしてですか？」
「誰にも邪魔されずに、イチャつけるから」
そう云われてアリエスは顔を真っ赤にする。
すると、レオは起き上がってアリエスを押し倒した。
「え！？」
「アリエス、しよう」
「ここでですか！？」
「誰も居ないんだから、しても大丈夫」
「そうですね」
クスりと笑うと、レオの背中に両手を回してキスをする。

「や、あっ、あっ…」
「アリエス、気持ちいい？」
「きもち…いい…です…あっ…」
「お前の中に俺を入れることは出来ないけど、これなら何度でもしてやれる」
「ですね…あっ、はぁ、はぁ、あっ、はぁ…」
アリエスのモノを握って、何度も扱いていく。
「これからは何度でもしような」
「はい…うれ…しい…です…」
今度は付け根から先端に向って舌を這わせ、先端を舐め回す。
「や、あっ、もう…だめ…」
「アリエス、いっていいよ」
「レオ…さん…くち…はなして…」
「わかった。じゃぁ手で受け止める」
アリエスを絶頂に追い込むため、素早く手を動かした。
「アリエス、好きだよ」
「はぁ、あっ、あっ…あぁぁぁぁぁ！」
爆ぜたアリエスは息を整える。
レオは手についた白濁を舐めようとして、アリエスに止められた。
「はぁ、はぁ、レオさん…ぜったいに…のんでは…だめ…です」
「どうして？」
「レオさんが…倒れた…原因は…それを飲んだ…から…です」
「そうだったのか！」
アリエスは身体を起こすと、レオの手についた自分の白濁を舐め取った。
「な、なめた！？」
「これからは、俺が自分のを飲みます」
「いいのか？」
「はい。レオさんが停止してしまうよりはいいので」

「アリエス、サンキュー」

それから一週間後。
一切なにも口にしていなかったアリエスの身体は、かなり衰弱していた。
レオにもアリエスの死が近いことはわかっていた。
「れお…さん…もう…だめ…みたい…です…」
「あぁ、わかってる。だから何も云うな」
「でも…いわせて…くだ…さい…」
声を出す力も残されていなかったが、最期の力を振り絞り、唇を動かす。
レオもアリエスの唇に耳を近づける。
「れお…さん…あい…して…ます…」
「あぁ、俺も愛してる」
レオはアリエスの頭を撫でると抱きしめた。
アリエスもレオの腕の中でそっと目を閉じた。
「アリエス…なにか云えよ」
身体を揺すっても、アリエスは反応しなかった。
「アリエス、俺もあとを追うから、待ってろ」
レオはそう云うと、自分の起動システム部分を何度も殴りつけた。
徐々に自分からは聞いたことがない音がして、停止が近いことがわかる。
「オー…ディン…せっかく…なおして…くれた…のに…すまん…」
オーディンに詫びを入れ、尚も殴り続けた。
「オー…ディン…つくって…くれて…さんきゅー…」
レオはここで殴るのを辞めた。
そして、あとは自然に停止するのを待った。
「あり…えす…いま…そっちに…いく……」
間も無くして、レオは完全に停止した。

５０５０年、人類は次元管理局のもと、妄想による2次元3次元の行き来を禁じられた。
次元管理局はこれを「次元移動禁止令」と定めた。
それから３０年後の５０８０年。
オーディンは、レオを失った悲しみから「次元移動禁止令」を廃除した。
これにより、人々は再び妄想をすることを許されたのであった。

最終章　４次元（後書き）

なんだか凄い話ですが、いかがでしたか？
これは、よく妄想する私が「２次元の扉が開かないかな」と思っているので、そこからヒントを得てこの話ができました。

こんな法律があったら、イヤですし私は確実に逮捕されますね（苦笑）
そして、まさかのラスト…あぁするのが二人のためだと思い、書きました（汗）
一言で云うと、オーディンが可愛そうですね（汗）
少しでも人とアンドロイドの恋が伝わっていれば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9361x/

次元の扉は開かれた

2011年10月26日03時06分発行